

# 「老人の民俗学」再考

Folklore of the Aged [Rojin] Re-examined

岡田浩樹

はじめに

①老人という隠喩と「老人の民俗学」

②韓国の還暦儀礼

③還暦儀礼の変化

④「老人の民俗学」再考

⑤「老人」というカテゴリー

おわりに

## 【論文要旨】

この論文の目的は、近年盛んになりつつあるかのように見える「老人の民俗学」という問題設定に対する一つの疑問を提示することにある。はたして「老人の民俗（文化）」という対象化が有効なのかを、比較民俗学（人類学）の立場から検討する。その際に韓国の事例を取り上げることにより、老人の民俗学の問題点を明らかにする方法をとる。

今日においても韓国社会では、儒教的な規範が人々の行動を強く規定し、敬親の意識や儀礼的な孝の実践が強調されている。いわば老人が明確な社会的カテゴリーとして意味をもち、加齢や老いが価値をもちうる社会である。今日でも盛んに行われる還暦（還甲）儀礼は、いわば個人が老人という社会的カテゴリーに移行する通過儀礼となっており、明確な「老人」というカテゴリーを可視化する装置となっている。にもかかわらず、韓国においても「老人の民俗学」という問題領域は成立していない。同時に韓国においても「老人」が相対的なカテゴリーであることを示した。

日本における「老人の民俗学」の展開を検討すると、その問題提起自体にある種の戦略的言説が込められている。つまり民俗学が近代以降における否定的な「老人」のイメージを覆すことで、高齢化を迎えつつある現代日本社会になにがしかの寄与をおこなうことができるという言説である。しかし人口統計学的に見ると、近代以前にはイメージとしての老人は存在しても、「民俗」を共有するような実体的な老人のカテゴリーが成立していないことが明らかである。したがって、近代以前の老人を今日まで連続するような実体的なカテゴリーとし、そこに「民俗」を見いだす「老人の民俗学」に対する疑問を提起した。

キーワード：老人の民俗学，韓国，還暦儀礼，カテゴリー，近代